

令和元年5月29日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13468

研究課題名(和文)大人による育児語使用と子どもの言語発達

研究課題名(英文) Adults' use of infant-directed special vocabulary and its relation to children's language development

研究代表者

針生 悦子 (Haryu, Etsuko)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：70276004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：大人は、乳児に話しかける時、育児語、つまり、乳児に話しかける時だけに使用する独特な語彙を用いる。育児語としては、擬音語(犬に対する「ワンワン」など)、単語音の繰り返し(靴に対する「クック」)などがよく使われる。

本研究では横断的研究と縦断的研究を行い、母親の育児語使用が、子どもの発達にともない、どのように変化するか、また、それは、子どもの言語発達にどのような影響を及ぼしているかを検討した。結果、母親の育児語使用は、子どもが1歳になったあと増え、2歳の誕生日までには減ること、また、このような育児語使用は、子どもの24か月時点での語彙にマイナスの影響は与えていないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大人は、乳児向けに話しかける時には、犬のことをワンワンと呼ぶなど、大人どうしの会話では使わないような単語、つまり育児語を使用する場合がある。これについては、本来、「犬」に対して覚えるべきラベルである「イヌ」の学習を妨げるのではないか、あるいは、いったん「ワンワン」と覚えても、結局はそれを別の単語「イヌ」に置き換えなければならないため、かえって負担ではないか、という声も聞かれる。しかし、実情としては、親は子どもの発達レベルに合わせて、このような単語の使用量を変化させており、育児語の使用は子どもの言語発達に害を及ぼしていないことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Japanese adults use ikujigo, infant-directed special vocabulary, only when they talk to infants. In ikujigo, onomatopoeic words (e.g., wanwan 'bowwow' for inu 'dog') or reduplications (e.g., kuoku for kutsu 'shoe') are frequently used instead of regular adult forms.

We conducted a cross-sectional and two longitudinal studies to investigate whether mothers fine-tune the use of ikujigo according to their children's development, as well as whether their use of ikujigo contributes to children's word learning. The results showed that mothers increase the number of ikujigo they use after their children's first birthday and decrease it by their children's second birthday. Additionally, not mean but range of the number of ikujigo a mother used across the child's development positively correlated with the child's vocabulary at 24 months, suggesting that not ikujigo-use per se but mothers' sensitivity to their children's developmental level may foster children's word learning.

研究分野：発達心理学

キーワード：乳児 言語 育児語 発達 養育

1. 研究開始当初の背景

幼い子どもに話しかけると、その話しかけ方は、声が高く、抑揚は大きめに、また、話しかけに使われる文は、より単純で短いものになる、といったことが知られている。このように特徴的な乳児向けの話しかけ方は、対乳児発話(Infant-Directed Speech; IDS)と呼ばれる。日本語話者が乳児に話しかける時には、このような話し方の特徴に加え、犬のことをワンワンと呼ぶなど、子どもに話しかける時にしか用いない、特別な語彙(育児語)の使用が見られる。これは、育児語と呼ばれ、大人がふだん用いている標準的な語彙である成人語とは区別される。

育児語として用いられるのは、伝統的な育児語(足のことを「アンヨ」と呼ぶなど)のほか、擬音語(犬のことを「ワンワン」、猫のことを「ニャンニャン」と呼ぶなど)もとの単語(の一部)の繰り返し(靴のことを「クック」と呼ぶなど)といった単語である。これらの単語においては、「ン」や「ッ」などの特殊音節が使われ、語頭音節が強調されていることが少なくない(Mazuka et al., 2008)。このような音韻形式の単語については、子どもにとって聞き取りやすいということを指摘する研究(Hayashi & Mazuka, 2006)もあり、そこからは、育児語の使用が子どもの単語学習に対して促進的な効果を持つことが予想される。

しかし、その一方で、育児語は大人が用いる通常の語彙(成人語)ではないため、このように特殊な語彙をいったん身につけたとしても、発達のどこかでそれらを成人語に置き換えなければならない。それゆえ、育児語使用の害を指摘する声も聞かれる(e.g., 久保田・久保田, 2015)。

このように、育児語の使用が、子どもの言語発達に対して、促進的な効果を持つのか、それとも妨害的な効果を持つのかについては、見解がわかれている。しかし、これまでのところ、実際の育児語使用状況や、それが子どもの言語発達に及ぼす影響について検証は行われてこなかった。

2. 研究の目的

育児語の使用が、子どもの言語発達に対して、促進的な効果を持つのか、それとも妨害的に働くのか、について、エビデンスを得ることを目的とした。

ただし、子どもに対して話しかける時に、大人がどれだけ育児語を使うかは、子どもの発達とともに変化していっていることが予想される。育児語の言語獲得への影響を検討するには、親が育児語を(どれだけ)使うかと、子どもの言語発達との関連をみるというだけでなく、より子どもの発達時期などを考慮した細やかな検討方法が必要になると考えられた。

つまり、育児語を使う場合、親は子どもの成長にともない育児語の使用量を変化させていっているはずである。使わない場合には、子どもの発達の過程を通じて、一貫して使わないということになるだろう。検討すべきは、子どもの発達経過に合わせて親の育児語使用はどのように変化しており、そのどの部分が子どもの言語発達に対してプラスもしくはマイナスの影響を及ぼしているか、という問題である。したがって、具体的には

(1) 親の子どもに対する育児語の使用は、子どもの月齢によってどのように変化するのか。

(2) 親の育児語使用のどの時点の、あるいは、どのような特徴が、子どもの言語発達と関連しているのか

を検討することとした。

3. 研究の方法

上記の目的のため、以下の3つの研究を実施した。

(1) 横断研究:

生後6か月、10か月、12か月、15か月、18か月の子どもを持つ母親に対して、子どもに話しかけるときのどのような単語を用いているか(育児語を用いているか)を、横断的に調査した。

具体的には、子どもが初期に獲得することが知られている単語のリストを母親に呈示し、それぞれの単語(の指示対象)について、子どもに話しかけることはあるか、話しかける場合にはどのように言って話しかけるか、を調査した(育児語質問紙への回答)。質問に対して、育児語が回答された項目の数を数えて、子どもの月齢ごとに、その平均をもとめ、生後6か月から18か月にかけての、育児語使用量の変化を検討した。

(2) 短期縦断研究:

上記の横断研究において、子どもが18か月の時点で育児語質問紙に回答した母親に対して、子どもが24か月になった時点で再度、育児語質問紙への回答を依頼した。また、24か月の時点の調査では、その時点での子どもの産出語彙についても回答をもとめた。

このようにして、18か月以降に、母親の育児語使用量はどのように変化するのか(増えるの

か、減るのか、変わらないのか)を明らかにするとともに、子どもの24か月時点の産出語彙に対して、18か月時点での育児語使用量がポジティブに関連しているのか、ネガティブに関連しているのか、また、24か月時点での育児語使用はどのように関連しているか、について、予備的に検討することをめざした。

(3) 長期縦断研究：

子どもが6か月、もしくは、10か月の時点が24か月になるまでのあいだ、ほぼ3か月おきに、母親の育児語使用量を縦断的に調査した。また、子どもが18か月、21か月、24か月の時点での産出語彙についても調べた。このようにして、横断調査で見いだされた育児語使用の発達的变化が、縦断調査でも確認できるか、また、そのような育児語使用の発達パターンの個人差が、子どもの初期の語彙獲得にどのように関与しているかを検討できるデータの取得をめざした。

4. 研究成果

(1) 横断研究：

母親の子どもに対する育児語の使用量は、全体としては、12か月と15か月のあいだで増加していることが確認された。なお、育児語質問紙において「この単語の指示対象について話しかけることはない」と回答された項目の数は、子どもが6か月の時点が最も多く、子どもが10か月になるまでに「話しかけない」項目数は有意に減少した。そして、それ以降の期間においては、「話しかけない」項目数に大きな変化は見られなかった。

育児語使用量の発達的变化と、「話しかけない」項目数の発達的变化、その両方の結果を合わせて考えると、12~15か月にかけて育児語使用量が増えるのは、単純に、「話しかけない」項目が減る、つまり、子どもに多く話しかけるようになった結果育児語使用も増えた、ということではないことが示唆された。むしろ、育児語使用量が増加するのは子どもが1歳を過ぎてからであり、そのことは、子どもがいくらかことばを話すようになったことが、親の育児語使用を引き出している可能性を示唆している。

(2) 短期縦断研究：

母親の子どもに対する育児語の使用は、子どもが24か月になった時点では、18か月の時点より減少していた。このように、親の育児語使用は、比較的短い期間のあいだに増減しており、親の育児語の使用期間は必ずしも長くないことが示された。ここから、親は子どもの成長(特に、言語発達の状況)に合わせて、育児語の使用を調整していることがうかがわれた。

また、18か月時点と24か月時点での母親の育児語使用量のあいだには正の相関があり、育児語の使用には、個人内での一貫した傾向があることが見出された。

ただし、18か月、24か月時点での母親の育児語使用と、24か月時点での子どもの産出語彙との関連は、単純ではなかった。すなわち、18か月時点の育児語使用と24か月時点の子どもの語彙とのあいだには正の相関が見られた。しかし、24か月時点の育児語使用と、24か月時点の子どもの産出語彙とのあいだに、明確な関連は見られなかった。

(3) 長期縦断研究：

育児語使用量の発達的变化は、縦断的に検討した場合にも、横断研究とほぼ同様なものが見られた。すなわち、1歳すぎに使用量は増え、24か月までには減少方向に転じるという発達的变化が見られた。

子どもの発達上の各時期における母親の育児語使用と、1歳後半以降の子どもの産出語彙との関連を検討したところ、おおむね1歳前半の時期における育児語使用と、子どもののちの語彙とのあいだに正の相関が見られた。また、子どもの発達過程を通じて、育児語の使用量を大きく変化させた母親と、使用量をあまり変化させなかった母親が見られたが、この変化量の大きさが、1歳後半以降の子どもの産出語彙とポジティブに関連していた。

全体の結果は、少なくとも、育児語の使用は子どもの初期の言語発達に対してネガティブな影響を及ぼしていないことを示唆するものであった。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 5 件)

針生悦子・齋藤友香 2017 「養育者による育児語の使用：子どもが生後6~18か月の時期に焦点をあてた横断調査より」 日本発達心理学会第28回大会発表論文集, p.387, 広島。

Haryu, E., & Saito, Y. 2017 Japanese mothers' use of infant-directed special vocabulary *ikujigo*: Its age-related change and role in children's word learning. *Poster presented at the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development*, Austin, USA.

Haryu, E. 2017 Use of infant-directed special vocabulary fosters word learning.

Poster presented at the 3rd Workshop on Infant Language Development, Bilbao, Spain.

針生悦子 2017 「母親の育児語使用：月齢変化と子の初期語彙獲得への影響」 針生悦子・村瀬俊樹・小林哲生(企画)シンポジウム「育児語を考える：なぜ大人は使うのか，そこから子どもは何を学ぶのか」 日本心理学会第81回大会，久留米。

Haryu, E. 2019 Mothers' use of infant-directed vocabulary and its relation to children's early language development. *Poster presented at the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Baltimore, USA.*

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：針生悦子

ローマ字氏名：HARYU Etsuko

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：齋藤友香

ローマ字氏名：SAITO, Yuka

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。